

生物共生のアーキテクチャ

洞穴

ヒトはあまりにも未発達の状態では新生児を生むため、保護のためのシェルターが必要だった。最初、利用したのは真猿類では、ネアンデルタール人とヒト以外には利用しない洞窟だった。洞窟は最初の居住空間になったが、それは自然地形をほぼそのまま利用したものであり、建築(物)の概念を外れているともいえる。洞窟への長期定住は、洞窟内外の環境汚染、病原菌の増加等をもたらした。しかし、高木を切り倒すための道具等が未発達だったため、森林の伐採はできず、ヒトによる周辺の野生生物の多様性の減少・変質は限定的だった。

始原の小屋

平坦地には洞窟は存在しないので、平坦地への移住にともない、その暮らしには洞窟に具わっていた‘被い’の機能をもつ屋根などの構造が必要になった。その最初の建築としてマルク・アントワーン・ロージェは‘始原の小屋’を発想した。この構造物は、平坦地(草原)への進出の拠点的な意義があったであろう。高木の伐採技術がない状況で作られる小屋は、高さがヒトの背丈にも満たないものであり、登山で用いるビバーク用のテント同様、居住性に劣り、長期の滞在には不適であったろう。

竪穴式住居

建築に画期的な進化をもたらしたのは、ヒトが背丈を優に超える高木を切り倒す、伐採技術の獲得であった。切り倒した高木を柱として、構造物の中心に置き、その四周に小枝や木々の葉、動物の毛皮や毛で編んだ織物などを張る構造は、建築物内で立ったまま行動ができ、内部で火の使用も可能となり、暮らしを快適なものにした。

やがて柱の下に礎石を置くことが考案され、柱の耐久性が向上し、穀類の貯蔵用など目的別に複数の建物を建てることで、集落化が進んだ。日本では、静岡県登呂遺跡や横浜の歳勝土遺跡など、多くの遺跡に復元されたものがある。三内円山遺跡などでは、集落中に高床式の建物も復元され、同居している。このような建築の開始以降、森林の伐採など、それまでとは質的・量的にも異なるスピードで進み、自然資源利用も加速し、多様性に影響を及ぼすようになった。

高床式住居

日本を含む湿潤地帯では、雨の多い季節は建物内は高湿状態となり、穀物などの貯蔵食料にカビ害や腐敗などが発生しやすい。木材の加工技術が進展し、地面に接していた面を、床として地上に浮かせる高床式の建築物が登場した。律令時代の官衛(つくば市の平澤官衛はこの例)など、高床式は高温多湿のアジアモンスーン地域では、暮らしに快適さを生むものであり、その後も主として木造建築では、床面を地表から離す様式が広く採用されることとなった。

床をもつことで、ムカデや昆虫類、ヘビなど、地面から直接居住空間に侵入する野生動物は減少した。さらに以降、ヒトの暮らしが、多様な生物と共生する意識が、多様な生物のうちヒトに危害や不快感を与える生物を差別・排除するものへと変じた。さらにヒトの別格化(ヒト優位)の思考が生れ、ヒトが多様性の一員である意識が次第に希薄化した。

組積造建築

木材の利用は、床の誕生を生むなど従来の住居を大きく変えたが、地球上には樹木が育たない乾燥地も少なくない。自然の石や人造のレンガ、さらに後にはコンクリートなどで建物の壁面を作り、壁によって屋根などの上部構造を支える建築法を生んだ。材木を柱や梁として用いて屋根を支える建築に対比できる建築といえる。しかし、校倉造りなど、木材を用いてこの様式で造られた建築物もある。

一般に木材による建築よりも石材やレンガを用いた組積造建築の方が耐年性に優れ、防御性も高かったので、材木の入手が可能な地域でも城郭など、あえてこの様式で構築された建築物も少なくない。外界との隔離が高まることで、ヒトをますます生物多様性の枠外に位置づけ、しかも優位性を有するとするという意識が高めた。このヒトの他に対する優位性は、未開民族や先住民、異文化をもつヒト自身の一部にも向けられた。

ドミノ・システム

その原理は1914年にル・コルビュジェによって発表された。鉄筋コンクリート造の床(水平スラブ)とそれを支える柱、上下階を結ぶ階段という最小限の要素で構成された部材によって、住宅を大量生産するために考案されたといわれている。コンクリート造りの柱と床に荷重を受け持たせるため、壁は荷重の担い手としては開放された。コンクリート造りの柱と床を組み合わせることで比較的容易に建物自体を拡大できる。この様式の建築物が席卷するなかで、一部で屋上庭園が誕生し、さらに自由になった壁面を植物で装飾するなどの、建築緑化が試みられている。

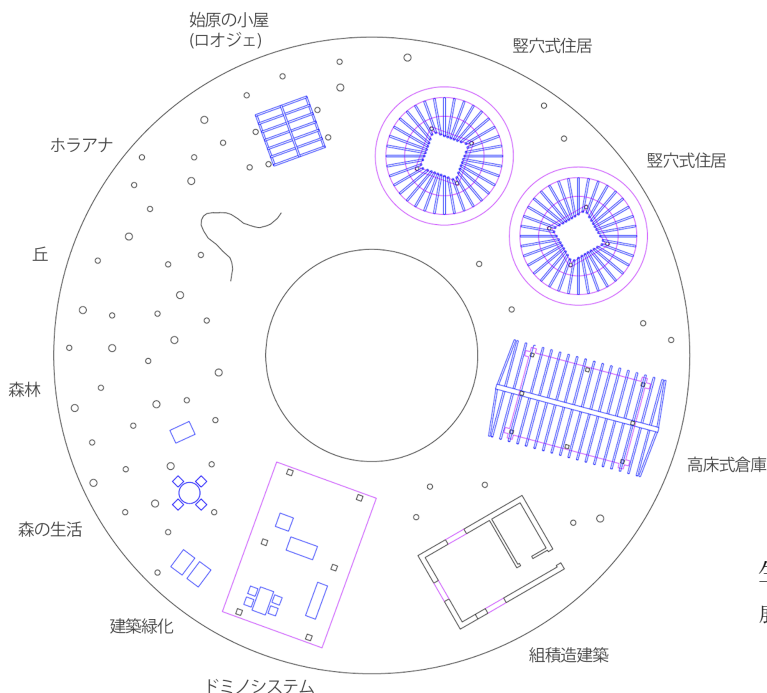
自然と共生する建築

日本のようにもともと森林が発達していた地域では、ヒトは自然と敵対し、それを破壊する行為は少なかったであろう。森林は建築に必要な木材を供給するだけでなく、薪炭、繊維・紙、種々の食物などヒトの暮らしに欠かせない諸資源を維持・増殖し、供給してくれる、‘生きた資源庫’である。その維持のために努めてきたといつてよい。居住空間に取り込まれた場合でも、林木を維持し、資源の源となる多様性の維持を図ってきた。屋上庭園や壁面緑化は、森林との結びつきの強かった日本などでは、歓迎されている。

未来の建築を考えるに際して、改めてヒトが生物多様性の一員であり、地球上で暮す生物は存在においてすべて等価であることを、より一層強く認識することが大切であると思う。建築においてもこの発想の転換がなされるべきだと思っている。

例えば、日本は森の国であり、放置すればどこでも最終的には森に還った。それはこの地域の植生の遷移の最終段階が森林であることを示している。遷移の最終段階に至る遷移途中には植物を欠いた裸地、草地、低木林などの植生も存在した。だが、放置すれば森に還る。その自然の摂理を汲み、森に還るにふさわしい地域作りに建築も貢献してはどうだろう。

大袈裟な表現だが、例えば建築物を森の中に散在する岩や石のようにみえるような修景はどうだろう。そうしたなかで、多様な生物を共存して暮す。それは建築でいえば、高床式や組積造建築の出現以前のヒトの暮らしに近い。しかし、私たちはその時代の暮らしに戻ることはできない。できることは積極的に多様性と共存する意識を高め、努めることであろう。例えば、林間の別荘等は、ある意味、森の中に散在する岩や石に類しているといえなくもない。そうした光景を別荘に限らず、可能な限り日常の生活空間にまで広げることは決して不可能ではないだろう。



生物共生のアーキテクチャ 大場秀章

展示制作: 東京大学総合研究博物館(松本文夫、二上和也)